中学校体育大会の事例研究

― 男女共同参画の視点からのプログラム検討 ―

勝木　洋子　　岸本　綾子*

文化環境学大講座　姫路市立小学校非常勤講師*

A case study of a junior high school athletic festival
— From the Viewpoint of Gender Equalty Program —

Yoko KATSUKI　　Ayako KISHIMOTO*

Laboratories of the Correlation for Environment and Humanity
School of Humanity for Environmental Policy and Technology
1-1-12 Shinzaike-honchou ,Himeji,670-0092 Japan

Elementary School Instruction Teacher
Himeji Boad of Education

1　はじめに

誰もがその人らしく生きていくことができる社会を目指し、男女共同参画社会基本が施行された。それを受け、県や市町の条例やプラン策定が進行中である。そこで子どもを取り巻く環境としてのおとなの意識も、子どもの未来を保障するため変革が必要となってきている。学校現場では男女混合名簿が一つのツールとして浸透してきているが、男女共生教育の阻害要因として「隠れたカリキュラム」は存在している。兵庫県Ｈ市は、2002年４月に市立小・中学校で、2003年４月に市立高校で男女混合名簿を導入した。これを期に男女共生教育の充実や「隠れたカリキュラム」の見直しが始まっている。また、市民グループの男女混合名簿に関する意識調査では児童・生徒と教師や保護者の意識のずれもみられた。そこで、これからの社会を男女がともに責任をわかちあいできるだけ対等なものにしていく国のあり方と、義務教育最後の場所である中学校の現状に視点をあて、教育活動の一つである体育大会の競技種目を検討し、男女共生教育を考察した。

2．緒　　論

(1)　教育における男女平等

学校教育全体を通して、人権の尊重、男女の平等、相互協力・理解についての指導の充実、教科書や教材における配慮、教員の養成・研修面での充実等を推進するよう、文部科学省（文部省）は都道府県の教育委員会等に対して情報提供、指導および援助を行っている。

1985年女子差別撤廃条約の批准にあたり、国籍法の改正、雇用機会均等法の制定と男女同一の教育課程が要請された。教育は、男女平等を実現するために社会の意識を変革する手段としての役割があり、性別に偏ったカリキュラムの編成は差別とされ、家庭科の男女共修が始まった経緯がある（赤松監修、1999）。1989年改訂の学習指導要領において、家庭科教育は、男女とも必修とされ、男女同一の教育課程となり、中学校については1993年度から、高等学校については1994年度から適用されている。また、小学校・中学校については2002年度から、高等学校については2003年度から実施の新学習指導要領（小学校・中学校については1998年、高等学校については1999年改訂）においては、男女相互の理解と協力に関する内容を充実しており、その趣旨の徹底が図られている。

また、スポーツ・体育の分野については、CEDAW（女子差別撤廃条約第10条ｇ項）でスポーツおよび体育に積極的に参加する同一の機会の要請が明記され、1989年の学習指導要領改訂で体育の男女差は消失している。つまり学校体育は教育の同一内容の要請がなされている。

(2)　運動会の歴史と現状

運動会体育大会の歴史は村の祭としての地域行事である（吉見、2001）。体育大会は村のハレの場として、

来賓として招かれた自治会、婦人会、民生児童委員、市議会議員、消防団長、老人会など地域の代表が中学校の指導の成果を見守る。保護者や地域の人々も学校指導のあり方を目にすることができる社会的背景をもつ。

祭である一方で、運動会は国家的な規律・訓練の枠組みをもつものでもあり（吉見、1999）、各集団の共同意識と相手集団に対する対抗意識を高める場でもある（吉見、1999）という歴史的背景がある。このため学校の体育大会は、整然とした行進、乱れのない演技等の徹底された集団行動（諸橋、2003）、あるいは真剣な競争、そしてより速くより高くより強くという優勝劣敗主義（熊安、2003）が求められてきた。スポーツは、より速くより強くを目指しながら男性中心に発達してきた歴史的背景（井谷、2001）がある。もともと、近代スポーツは基本的に男性のものとして作り出されてきた（伊藤、2001）一つの社会制度である（メスナー、M.A. 2004）。つまり体育やスポーツ文化そのものが社会のジェンダー規範を強固にし、かたや社会のジェンダー規範から要請を受け、両者が撚り合わされ分かちがたいものになっている（井谷、2004ａ）。

(3)　学校体育と生涯学習

学校体育はスポーツを主たる教育内容としているため、優勝劣敗主義や男性優位主義から逃れられないできた。しかし現在では、QOL（日常生活の質）に対するスポーツの貢献が重要視されているため、スポーツや運動をする体力としての「競技力に関連する体力」から、日常生活における「健康に関する体力」に「体力」の比重が移動してきている（飯田、2004）。この流れから2002年学習指導要領は、生きている状態をよりよく保つ能力としての防衛体力も体力としてとらえ、体への気づき、体の調整、仲間との交流などを、体つくり運動として盛り込んできた（井谷、2004ｂ）。

(4)　「隠れたカリキュラム」としての体育

さて、学校は社会の中で最も平等な場であると考えられてきた（朴木、2004）。人種、身分、階層、性別等々による差別が最もない場所とされてきたのである。内閣府の意識調査では学校教育の場は平等であると思っている成人の割合は6割以上である（内閣府、2002）。

しかし、学校教育は新しい知識や価値観を伝える場所でありながら、同時に昔ながらの心情や行動様式を伝える場所でもある（小熊、2002）。また、現在の学校教育には、性別を捨象して男女を平等に扱う原理と、男女を区別して固定的な性役割に沿って扱う原理という、２つの原理がはたらいている（木村、1999）。さらに学校教育は男女の性別による取り扱いの格差を縮める役割もしているが、同時にその格差を拡大する役割も果たしている（木村、2003）。そういった「隠れたカリキュラム」の存在が指摘されて、学習活動における教師の教え方や何げない言葉・動作、学校行事における男女の役割分担、男子が先に並ぶ男女別名簿などの見直しが始まっている。「隠れたカリキュラム」は男女の学力差も体力差もつくってきたのである（諸橋、2003前掲）。

学校は依然として男性優位の場であり、教職員は上級学校に行くほど男性が多く（笹原、2003）、管理職は男性割合が高い（兵庫県立女性センター、2001）。また中学校の体育科の教員は66.9％が男性である（田原・芹澤、2004）。さらに兵庫県における高等学校保健体育教員の採用試験倍率は、女性の競争倍率が男性の数倍である（井谷、2004ｂ　前掲）。

(5)　ジェンダー

Gender　ジェンダーの概念／定義は、社会的・文化的性差のことを指し、生物学的な性差（性別）とは区別されている。（Genderが社会的・文化的に定義された性差のことを指すのに対し、Sexは生物学的に定義された性差を指す。）「女性は家事・育児」、「男性は仕事」、「男のくせにすぐ泣く」、「女のくせに生意気だ」など、女らしさ、男らしさといった見方は、「自然な特性」に基づいていると思われがちであるが、こうした通念や性別役割分担にとらわれた見方を「ジェンダー・バイアス」という。子どもたちがありのままの自分を生きることを困難にし、人々の多様性、可能性を阻むジェンダーを再考することが求められている（UNFPA国連人口基金）。

3　目的と方法

目的：中学校体育大会の種目から男女が同じ種目に参加する機会の実態を明らかにし、男女共生教育を考察する。

方法：資料分析

- 兵庫県Ｈ市内全中学28校の2003年体育大会プログラム
- 兵庫県Ｈ市教育委員会の男女共生教育の進捗状況調査結果

調査対象：Ｈ市は兵庫県下で２番目に人口の多い48万人の中核都市である。公立中学校は28校あり、他に女子のみ、男子のみの私立中学校（中等部）が数校ある。学校は市の海岸線から中心部、山間部へと点在している。公立中学校の体育大会は例年9月に28校すべて同日に実施されている。

4 結果と考察

プログラムを分析した結果、種目の合計は458種目であった。このうち男子にあるが女子にない種目と女子にあるが男子にない種目の合計は123種目であった。以後、男子にあるが女子にない種目と女子にあるが男子にない種目をあわせて、「男女差のある種目」と表記する(表1)。

表1 H市の属性

人口	中学校数	種目の総合計	
			うち男女差のある種目
48.0万人	28	458	123

(1) 男女差のある種目

全中学校の全種目を集計し、男女差のある種目の割合を示した(図1)。男女差のある種目は123種目あり、全種目に占める割合は26.9%であった。男女差のある種目のうち騎馬戦やダンスなどの男子女子の性別によってわけた集団演技競技、1,500m1000mなどの長距離走と4人リレーを比較した。

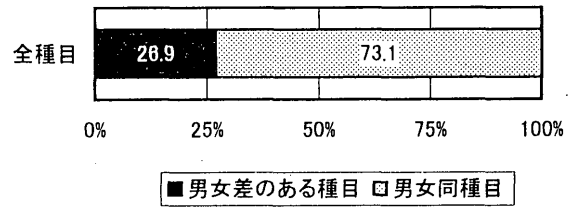

図1 男女差のある種目割合(全種目)n=458

騎馬戦ダンス等の男女別の集団演技競技は14校で実施されており、50%にあたる。13校は男女別の集団演技競技がない。残る1校は男女とも騎馬戦と棒引きをしている。長距離走種目に男女の距離差を設定している学校は19校67.9%である。長距離走種目が男女同じ距離という学校はなく、残り9校は長距離走種目がない。男女別4人リレーはすべての学校で実施され、男女の距離差のある学校は26校92.9%であった。残り2校は1人あたりの距離が男女とも100mであった(図2)。

(2) 男女差のある種目の内訳

男女別の集団演技競技を実施している14校の種目の内訳を図3に示した。男子は騎馬戦、組体操がそれぞれ6校で、女子はダンス・踊りが7校、棒引き3校、マスゲーム1校である。棒引きは男女共通種目であるが学校によって男女どちらかの種目としている。

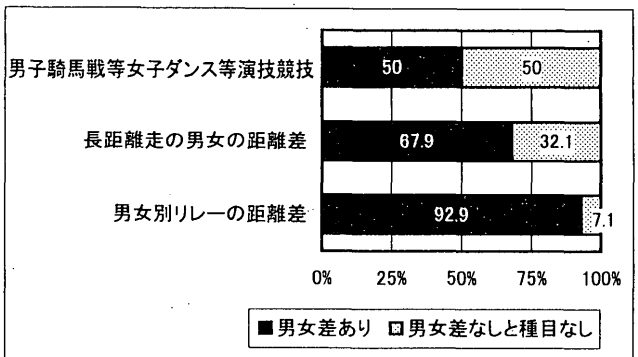

図2 男女差のある種目割合(3種目)n=28

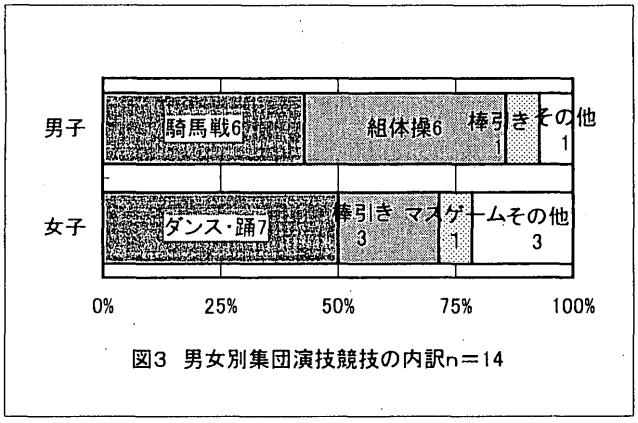

図3 男女別集団演技競技の内訳n=14

長距離走種目の距離差は19校であった。その内訳を図4に示した。女子1,000m男子1,500mの組み合わせで実施している学校が8校、女子800m男子1,500mの組み合わせが7校であった。また、男子だけに設定されて女子には種目そのものがない中学校は2校ある。

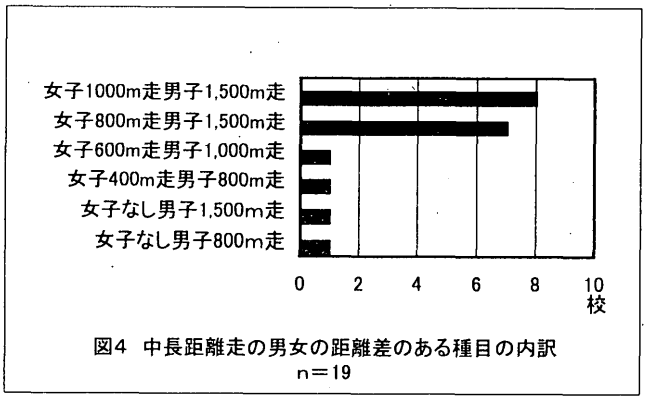

図4 中長距離走の男女の距離差のある種目の内訳
n=19

男女別4人リレーにおいて男女の距離差のある26校の内訳を図5に示した。女子が1人100m男子は1人200mとする学校が24校あった。残り2校は女子50m男子200mの組み合わせと、女子は種目がなく男子は200mの組み合わせである。女子は男子の半分以下の

距離をとっている学校が全体の92.9%であった。

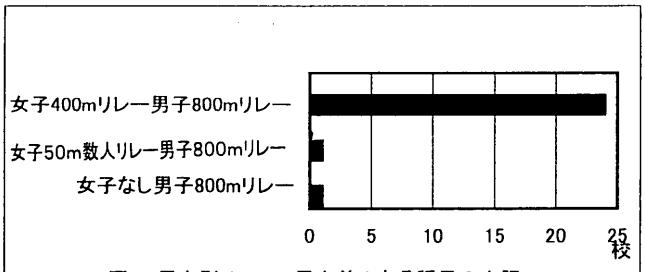

図5　男女別リレーの男女差のある種目の内訳n＝26

(3)　学校の実態

各学校ごとに、男女差のある種目がプログラム全体の何%にあたるかを示した（図６）。男女差のある種目割合が０%から50%まで、28中学校は分布する。中央値は27.7%である。

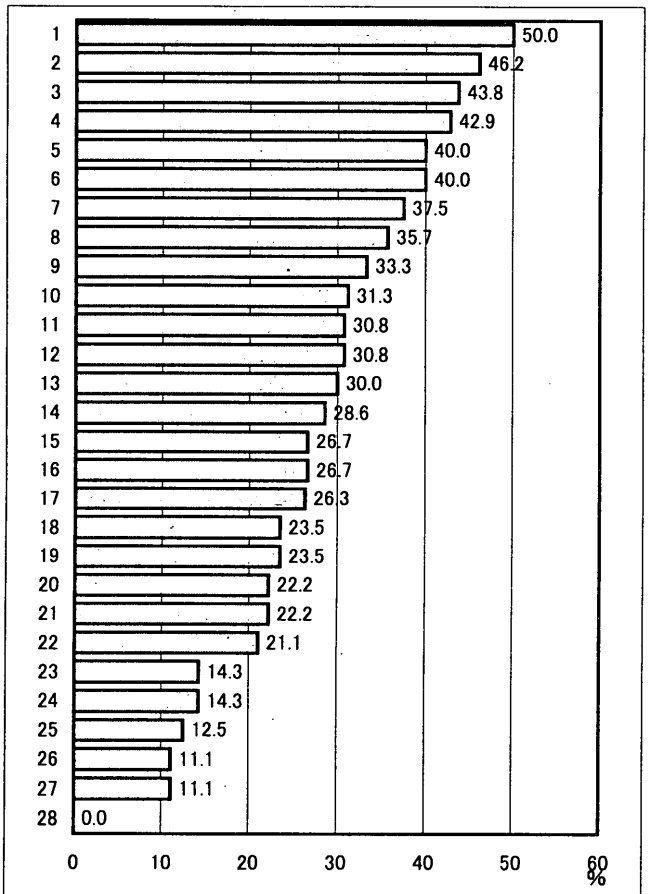

図6　学校別男女差のある種目割合 n＝28

さらにプログラムを集団演技競技種目、距離走種目、リレー種目、全員参加種目、その他種目に分類し並び替えた。男女差のある種目は網掛けをし、その他種目はプログラムナンバーに網掛けを記した（表２～５）。

表２は男女差のある種目率50%のKR中のプログラムである。男女差のある種目は、男子400ｍ競争決勝、女子1,000ｍ競争決勝、女子60ｍ競争決勝、男子1,500ｍ競争決勝、４×100ｍリレー女子決勝、４×200ｍリレー男子決勝の速さを競う距離競技6種目と、全校女のダンス、全校男の組立体操の美しさとたくましさを表現する２種目で、合計８種目であった。また、競争という表記がされている。

表２　ＫＲ 中（１位）

11	ダンス	全校女
14	組立体操	全校男
2	男子 400m競争決勝	学級選手
6	女子 1,000m競争決勝	学級選手
10	男子 1,500m競争決勝	学級選手
7	女子 60m競争決勝	学級選手
3	女男 200m競争決勝	学級選手
8	女男 100m競争決勝	学級選手
15	4×100mリレー女子決勝	学級選手
16	4×200mリレー男子決勝	学級選手
9	男女混合リレー決勝	学級選手
4	女男ハプニングリレー決勝	学級選手
5	KR 特急ムカ電車 2003 号	全校生
1	全校体操	全校生
12	各部パレード	部活動部員
13	来賓・PTA演技	来賓・PTA

表３・表４は、28校中14位15位で中央値となるTA中とHN中のプログラムである。TK中の男女差のある種目は４×200ｍリレー決勝（男）、４×100ｍリレー決勝（女）、全校女子のダンスと全校男子の組体操の４種目である。HN中の男女差のある種目は、女子選手の800ｍ決勝、男子選手の1,500ｍ決勝、女子選手の４×100ｍリレー決勝、男子選手の４×200ｍリレー決勝の４種目であった。

表３　ＴＡ 中（13位）

8	ダンス	全校女子
14	組体操	全校男子
2	100m走予選(女・男)	学級選手
3	200m走予選(女・男)	学級選手
10	100m走決勝(女・男)	学級選手
11	200m走決勝(女・男)	学級選手
12	4×200mリレー決勝(男)	学級選手
13	4×100mリレー決勝(女)	学級選手
4	男女混合リレー決勝	学級選手
7	町別対抗リレー予選	町代表選手
15	町別対抗リレー決勝	町代表選手
1	全校体操	全校生
5	“それいけ　むかなわ”	全校生
6	来賓・PTA演技	来賓・PTA
9	部活動紹介	部活動生徒

表４　ＨＮ 中（14位）

5	800m決勝	女子選手
6	1,500m決勝	男子選手
1	100m決勝	女子男子選手
2	200m決勝	女子男子選手
3	400m決勝	女子男子選手
11	4×100mリレー決勝	女子選手
12	4×200mリレー決勝	男子選手
13	4×100mリレー決勝	女子男子選手
7	スウェーデンリレー決勝	女子男子選手
14	ブロック対抗リレー	各ブロック選手
4	Endless Jump	全校生
8	応援合戦	全校生
9	体育部部活動紹介	各部部員
10	あすへつなごう！ふれあい競技	PTA 来賓生徒

表５は男女差のある種目率０％のＪＮ中のプログラムである。男女の距離差は距離競技種目にもリレー種目にもない。また、性別の集団演技競技もない。その他種目は他校と同様の部活動、来賓、PTA、職員関連種目のほかに、綱引き、出前で・ＧＯ、足並みそろえて、デカパンレース、学年演技（J中ソーラン踊り）の９種目であった。なお、100ｍについては、予選に２年男子選手という記述がある。これは、決勝に男女選手とあるので男女差のない種目とみなした。

表５　ＪＮ 中（28位）

2	100m（予選）	１年男女・２年男子選手
3	200m	男女選手
17	100m（決勝）	男女選手
18	400mリレー	女子選手
19	400mリレー	男子選手
5	１年学級混合リレー	男女選手
6	２年学級混合リレー	男女選手
7	３年学級混合リレー	男女選手
14	部活動対抗リレー	代表選手
1	ラジオ体操	全校生
20	ムカデ競走	全校生
8	綱引き（予選・準決）	男女選手
16	綱引き（決勝）	男女選手
4	出前で・GO	男女選手
9	足並み揃えて	男女選手
10	デカパンレース	男女選手
12	Ｊ中ソーランおどり	３年生
13	部活動行進	各部部員
15	PTA演技	PTA
11	来賓・職員演技	来賓・職員

(4)　男女共生教育進捗状況調査

Ｈ市教育委員会が実施した男女共生教育推進状況調査結果を図７に示した。出席簿、指導要録、学級名簿の混合名簿導入、男女共生教育担当を置く学校は90％を超えている。また、体操服や名前シールは、およそ20校70％の学校で男女同一となっている。しかし、文集の掲載順、職員の共通理解、カリキュラムの位置づけと授業の実施、混合並び、保護者への啓発、呼称「～さん」、人権コーナーの設置と男女共生教育の推進、健康診断票等と通知表の混合名簿使用は実施していない学校のほうが多い。

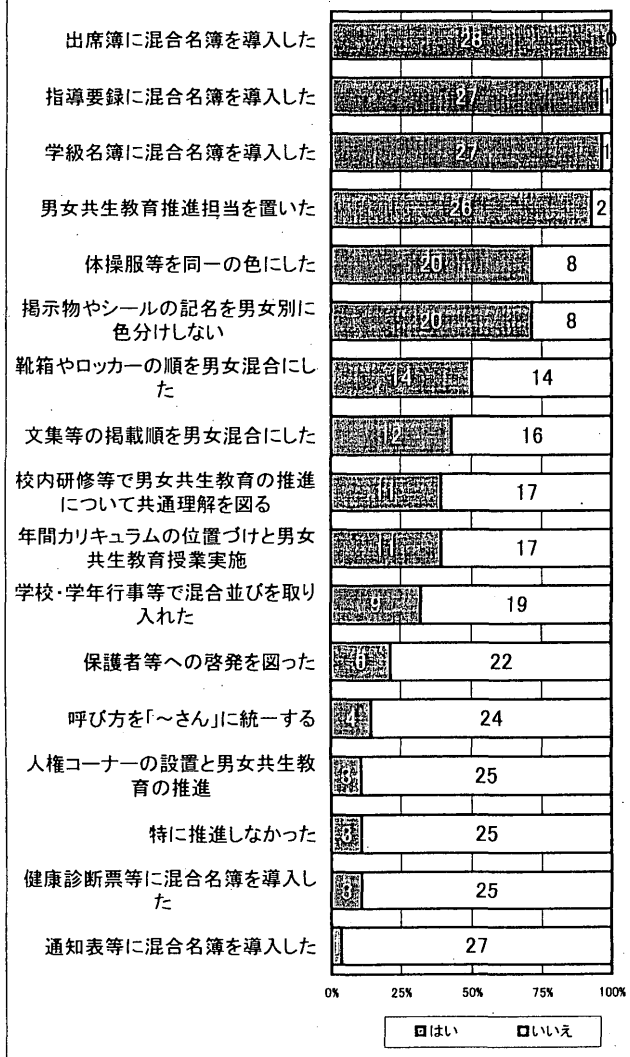

図7　H市中学校　男女共生教育進捗状況
（校）
（H市教育委員会　男女共生教育推進状況調査結果より作成）

5　まとめ

Ｈ市立全中学校の体育大会の種目を検討した結果、プログラムの26.9％に男女差のある種目がみられた。騎馬

戦ダンス等の男女別の集団演技競技は50％の学校で実施している。長距離走種目は、19校67.9％で実施され、実施校すべてが男女の距離差を設定している。男女別４人リレーはすべての学校で実施され、男女の距離差は、26校92.9％の学校に存在した。

長距離走種目では、女子は男子より短い。男女別４人リレーの距離は、女子100ｍ×４人男子200ｍ×４人の組み合わせが24校である。中長距離種目では、女子の距離は男子より短く、男子の距離の３分の２から半分であった。また、女子にはない種目でもあった。

学校別の体育大会種目に占める男女差のある種目割合は、最高が50％最低が０％で学校により差が大きい。同じ市内の中学でこのように種目において違った教育がなされている。

距離の差は女子が劣っていることのメッセージであり、個々によって能力は多様であるのに、固定的な決めつけが存在しているのではないだろうか。あたりまえとされ決めつけられた学校生活の中で、特に女子生徒の意欲や成就感は高まらない。

市教育委員会の男女共生教育進捗状況調査では、男女別の色分けや体操服の男女別、名簿などハード部門の見直しは進んでいる。しかし、教職員の共通理解、カリキュラム、混合並び、「～さん」の呼称、積極的な取り組みや保護者への啓発というソフトの部分で、進展がない状況がうかがえる。

6　おわりに

運動能力は女子より男子が優れているといった決めつけが、個人の能力ではなく、社会的刷り込みによって生徒たちに与えられているのではないかと危惧する。全中学が毎年同じ種目をすることを望むことがこの調査の目的ではなく、男女ができるだけ中立的に扱われることを望んでいる。日本のジェンダー研究は、体育・スポーツこそジェンダーを再生産する装置として作用している（飯田、2003）と指摘している。学校体育は、男女差を解消する教育を要求されていることを強く意識化したうえで、男女共同参画社会の形成に向けた実践を求められている。H市では進捗度のばらつきがあり、体育大会のコンセプト（概念）が学校によって大きく異なっていることが明らかとなった。男女差のある種目率が高い学校では、男はたくましくより強く、女は美しくそして男子の半分の距離を走ればよいと指導されていた。男女の距離の違いや男女別の種目は、明らかに男女同一の教育内容ではない。飯田・井谷は、距離の差は女子が劣っていることのメッセージであり、また少なくなってきた女子のダンス、男子の組体操や騎馬戦にはジェンダー秩序の再生産が隠されていると述べている（井谷、2004ｂ）。

生徒たちは「運動会の種目はゼッタイに差別している。組体操とか長距離とか。男の子もみんな体力もってるわけじゃないのに、女子より男子のほうがキツイと」いう意見もある（大同教、2001）。

2004年９月に実施された市内中学校の体育大会では、新しい動きがいくつかみられた。TK中では、長距離走種目が学級対抗種目に変更された。これまでの男子1,500ｍ女子800ｍの２種目が「足並みそろえて」と「背中でダッシュ」になった。体育主任の話によると、「学級対抗全員参加競技に変更することは、団結心を養おうとする目的で教員全員が決めた」のである。またここでは、出場者の紹介場内アナウンスは男女とも「～さん」である。さらに体育の授業は男女共習で実施している。そして体操服も２年前に変更されて男女同一のデザインとなっている。KR中では、全校女子のダンスがなくなりKR中ソーラン節が新設された。この種目の参加者は男女生徒とされ、希望者が参加した。生徒に選択権が与えられたのである。希望者は、女子が数人を除くほぼ全員で、男子が全体の１／４ほどであった。場内アナウンスでは「希望者の男子がはいっています」と報告されていた。

しかし、これらの学校でも、男子全員による組体操や騎馬戦があり、TK中の騎馬戦は、男子全員が上半身裸で参加し、競技時間も女子棒引きの２倍かけて一騎打ちをしている。また、SY中の組体操も、男子全員が上半身裸で参加し、競技時間も女子SYソーランの５分に対し30分近くあった。こうしたプログラム紙面上ではわからない事項は実態調査が必要であり今後の課題としたい。

ジェンダー・バイアスから自由になりたいと思う考えを無視し、配慮する必要のないものとして中学校の学校体育がなされている現状があった。女子生徒たちは中学校生活の中で、男子に次ぐ劣位の自分を自覚してしまい、「男子ほど期待されない存在」としての低い自己評価を女子の内面に生み出し（木村、1999）、一方男子生徒たちは、女子より優位に立つことを強要され、それゆえに自分のひ弱さ、孤立感と過剰な＜男らしさ＞幻想とのジレンマで苦しむ（伊藤、2003）。

家庭科とは異なり、体育科の内容によっては、子どもたちのジェンダー・バイアスを強化することにつながる危険性を孕んでいる（佐野、2004）ことが指摘されている。学校体育の共習・別習の問題、男女が競う問題については次の課題としたい。

また、混合名簿導入に対する意識調査が導入半年後に実施されている。これは、市内全小・中学校の保護者・

教職員・児童生徒（合計7911人）に対して実施された市民グループの調査である。その結果から、特に中学校教職員の受け止め方が消極的であることがわかった。その理由は、男女混合名簿の形式的変化が先行したためとしている。男女混合名簿の導入理由と男女共生教育の意義が理解されないまま、制度面での整合性（例えば進路関係）がともなわないまま、さらに教職員の研修が不十分で教職員自身が偏った意識にとらわれていることなどが、背景にあると分析された（学校におけるジェンダー教育を進める会、2003）。

謝　辞

資料収集に関し、あいめっせ（姫路市男女共同参画推進センター）と姫路市教育委員会の協力を得ました。心から感謝申し上げます。

参考文献

メスナー、M.A.　2004　吉川康夫訳　スポーツ・男性・ジェンダー　スポーツとジェンダー研究vol. 2　PP.67-84
伊藤公雄　2001　スポーツ教育とジェンダー　杉本厚夫編　体育教育を学ぶ人のために　世界思想社　PP.124-141
井谷惠子　2001学校体育と女性　井谷惠子・田原淳子・來田享子　目で見る女性スポーツ白書　PP. 193-219
井谷惠子　2004 b　学校体育とジェンダー　飯田貴子・井谷惠子　編著　スポーツ・ジェンダー学への招待　PP. 175-184　明石書店
井谷惠子　2004 b　前掲P.183
井谷惠子　2004 b　前掲P.181
井谷惠子　2004 a　共存関係にある体育とジェンダー　スポーツとジェンダー研究vol. 2　PP.2-3
吉見俊哉　1999　ネーションの儀礼としての運動会　吉見俊哉　白旗洋三郎　平田宗史　木村吉次　入江克巳　紙紙透雅子　運動会と近代日本 PP. 8-53 青弓社
吉見俊哉　1999　前掲　P.32
吉見俊哉　2001　運動会と学校空間　杉本厚夫編　体育教育を学ぶ人のために　PP. 42-60　世界思想社
熊安貴美江　2003　男女いっしょの体育は無理？　天野正子／木村涼子　ジェンダーで学ぶ教育　世界思想社PP.119-134
熊安貴美江　2003　前掲　P.132
笹原恵　2003　男の子はいつも優先されている？　天野正子／木村涼子　ジェンダーで学ぶ教育　世界思想社PP.84-101
諸橋泰樹　2003　ジェンダーというめがね　PP.189-120フェリス女学院大学
諸橋泰樹　2003　前掲　P.115
小熊英二　2002　＜民主＞と＜愛国＞　PP. 354-393　新曜社
上原恵美子　2002　「男らしさ、女らしさ」について　産経新聞大阪版2002. 12. 25掲載記事　引用は伊藤公雄 2003「男女共同参画」が問いかけるもの PP. 136-138インパクト出版会
赤松良子監修国際女性の地位協会編　1999　女性の権利―ハンドブック女性差別撤廃条約　PP.90-94　岩波ジュニア新書
芹澤康子・田原淳子　2004　ジェンダーの視点からみた中学校体育の実態調査報告書 P. 6
内閣府　2002　男女共同参画に関する世論調査
飯田貴子　2003　スポーツ文化の変革を求めるジェンダー研究　スポーツとジェンダー研究vol. 1　PP.2-3
飯田貴子　2004　体力観の形成とジェンダーに関する調査研究　スポーツとジェンダー研究vol. 2　PP.31-42
兵庫県立女性センター　2001ひょうご女と男のデータブックP.13
朴木佳緒留　2004　ジェンダーの視点からみた学校教育の課題と展望　スポーツとジェンダー研究　vol. 2　PP.49-50
木村涼子　1999　学校文化とジェンダー　P.6 勁草書房
木村涼子　1999　前掲 P.90
木村涼子　2003　パネルディスカッション「スポーツのジェンダーを展望する」　スポーツとジェンダー研究vol. 1　PP.54-67
学校におけるジェンダー教育を進める会　2003　兵庫県姫路市における男女共生教育に関する調査報告書―男女混合名簿の導入についての意識調査
大阪府人権・同和研究協議会　2001　大阪の子どもたち―子どもの生活白書2001年版　P69
飯田貴子 2003　スポーツ文化の変革を求めるジェンダー研究　スポーツとジェンダー研究vol. 1　PP. 2―3
伊藤公雄　2003　「男らしさ」という神話　P.71　日本放送出版協会
佐野信子　2004　男女共習VS男女別習―男女共習体育授業は本当に必要だろうか？　スポーツ・ジェンダー学への招待　PP.221-224　明石書店
UNFPA　国連人口基金　http : //www.unfpa.org

（平成16年10月 4 日受付）